

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

ありがとう

翠星高等学校一年

安藤 あんどう

零 れい

僕は自分の気持ちを言葉にしたり、文字にしたりするのが苦手だ。だがこのことは何の苦もなく言える。「母を愛している。」これは多くの人も同じことが言えるだろう。しかし誰も言おうとはしない。陳腐で言うのも恥ずかしいセリフだからだ。しかし母親は子への愛を言葉にするごとに何の恥じらいも無い。少なくとも僕の母はそうだ。そして多くの母親もそうだろう。母親が子への愛を言葉に、形にする事はあるべき姿だと僕は思う。だがそれを当たり前的事だと思った事はない。そして感謝を欠いた事も無い。

僕の家は母子家庭だ。僕が小学校2年生のときに父は病気で亡くなった。父と暮らした日々の事はあまり覚えていない。父と釣りに行ったり、一緒に散歩した時の事を辛うじて覚えている程度だ。何せ8年以上前の事だ。だが覚えていないと言って遊んでもらえなかったわけではない。母に聞いた話では、いろんな場所に連れて行ってくれたりなど、大層可愛がってくれていたそうだ。だがそんな日々さえも忘れてしまった。そんな僕でも忘れられない思い出がある。それは、病院で冷たい機械に囲まれている父の弱り切った姿、そして父が亡くなった日の事だ。

僕は何度か父の入院している病院に行ったことがある。しかし僕と姉といとこ達（父の甥）は病室の父と会う事をあまり許されなかった。それでも何度かは会う事を許された時があった。しかしその事もほとんど忘れてしまった。当時僕は父の病気がそんなに重いものではなく、すぐに退院できるものだと思っていたので、覚えておこうとおもっていなかったのだ。しかし、冷たい機械に囲まれている弱った父の姿は、僕の元気な父のイメージとはかけ離れていた。それはあまりにもショッキングな光景で、僕は父のことをあまり見ることができなくて、涙を必死にこらえながら周りの機械をずっとと見ていることしかできなかった。しかし、そんな父の姿と同じくらい悲しかったのは母の悲しそうな顔だ。

そして数か月がたった。僕はまだ父が帰ってくると信じていた。そんなある日、僕は友達と遊んだ後の浮かれた気分で家に帰った。いつもの

様に「ただいま」と言って家に入ると、悲しそうな顔の母が出迎えた。あの日病院で見たあの顔だ。母は「大事な話がある」と言って、僕をソファに座らせた。僕は「なんだろう」と好奇心と恐怖を抱えながら母の言葉を待った。すると母は口を開き、こう言った。「お父さんが亡くなった。」と。僕は最初何を言っているのか理解できなかった。それだけ衝撃だった。しかしすぐに理解した。父はもう帰って来ない、もう会えない、と。僕はリビングで、姉は和室で泣いていた。母は泣きながらリビングと和室を行き来して僕と姉をなだめ続けた。しかし、今なら分かる。一番辛かったのは母だ。

その日から僕の家は母子家庭になった。母は看護師の資格を持っていたので、すぐに看護師として働き始めた。だが、家事もしなくては行かないので、正社員ではなくパートとして働いている。母は日々の仕事と家事で疲れているのにも拘らず、最大限の愛情を注いでくれている。僕が学校や部活動で疲れて帰った時も、嫌な事があった時も、いつも変わらない態度で接してくれる、だが僕は知っている。一番疲れているのは母だ。

これは母から聞いた話だが、父は亡くなる前に病室で母に、「子供達を頼んだ」と話したそうだ。その約束は今でも守られている。そのお陰で今僕は生きている。その事に対しての感謝の心は忘れた事は無い。これからも忘れるつもりも無い。

父は僕が親孝行らしい親孝行をする前に亡くなった。僕が父よりも長く健康に生きる事がせめてもの親孝行だろう。僕は父に親孝行をする事ができなかったもので、その分を母にしようと思う。今できる親孝行は必死で勉強して、その姿を母に見せる事だと思う。そして、いつかその努力が実った時に、辛い事があっても、悲しいことがあっても、期待通りに生きる事ができなくても、すべての僕を受け入れてくれる母に最大の「ありがとう」を贈りたい。